

「絶海の孤島」トポスの成立

岩尾, 龍太郎
西南学院大学

<https://doi.org/10.15017/2320974>

出版情報：九州人類学会報. 26/27, pp.1-10, 2000-11-22. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

「絶海の孤島」トポスの成立

岩 尾 龍太郎（西南学院大学）

「絶海の孤島」の逆説

「絶海の孤島 (desert island, desolate island)」の物語は、どこか逆説を含んでいる。陸の孤島も含めてこのトポスは、他の地域からの隔絶を前提とする。隔絶しているのであれば、その島にどうやって辿り着いたのか、その島からどうやって帰還できたのか。物語が成立するためには、また物語が伝達されるためには、同一の主体ではないにしても、行って還ったということ、つまり何らかの交通が前提とならざるをえず、とすれば、すでに隔絶していなかったということになる。では、それまで見つからなかったのはなぜか。

問題を哲学的に広げよう。交通と孤立は、相互に依存し合う関係にあるのではないか。孤独、独立というテーマ、個人が独りで何かをする、独自の内面があって、それを告白するということ自体が、社会に向って屹立するという形での緊張関係、否定を媒介にした関係を前提にするのではないか。西洋の個人と東洋の隠遁者は、ともに社会との関係を含んでいるが、東洋の隠遁者が、例えば『方丈記』の鴨長明のように、社会の周縁部としどけなく浸潤し合うのに対して、西洋の個人は、「絶海の孤島」トポスのような矛盾を抱えて存在しているのではないか。こういった問題が考えられる。

「絶海の孤島」の物語は、「交通」の歴史と関係している。ここでの「交通」は、戦争、交易を含む概念である。この「交通」の密度と拡がり、西欧における「絶海の孤島」という語りの前提になっている。オデュッセウスの島巡り、島に遺棄されたピロクテテス、シンド・バットの漂流譚などを想起しよう。これらの背景には、異様に「交通」に富み抗争に明け暮れたヨーロッパ地中海文化圏があった。地中海を取り囲む地域では、古代から現在に至るまで、多様な民族、国家がせめぎあっている。そのせめぎあいが、海・外部へ船出し、他者と遭遇し、差異経験を吸収しつつ「自分たち」という主語概念の同一性を立ち上げる旅行記述の伝統を生んだ。消えていったフェニキア人の記録、いまなお西欧の影におかれたイスラム系の記録もあっただろう。それらと混淆しながら「絶海の孤島」を夢見る幻想旅行記が綴られた。それらから、大航海時代の西欧の実際の冒険・探検が紡ぎ出されたといってもよい。『オデュッセイア』からデフォー『ロビンソン・クルーソー』への伝統、これへの反発としてのジョイス『ユリシーズ』、この三つだけでヨーロッパ思想史を語ることもできる。

興味深いことに、「島」を表す言葉に、日本と西欧では、語義・語感の差がある。日本

語「しま」は、「島」のほかに「洲」「山斎」「縞」とも表記され、互いに通い合う語義をもっている。地名で「島」が付くところは、内陸・川との関係が深い。松本から梓川を遡ったところにある「島々」は典型だろう。川の中下流域の砂州・土砂堆積が「しま」と呼ばれている。「志摩」「糸島」も半島である。このように日本語「しま」は、内陸・川との関係が深く、そのせいか、日本のお節介行政は土木資本と結託して島にすぐ架橋し半島化する。採算を無視して三ルート多数の本四架橋。近場で言えば、平戸大橋、生月大橋、天草五橋（十橋にする土木計画あり）……。「しま」は、「山斎」（庭）、「縞」模様、ヤクザのシマという用語に表われているように、陸地の異質な一部を均質な平面へと織り込み馴らす観念を伴っている。このように「しま」という言葉の響きにまったく孤島感がない。だから日本のロビンソンとでもいうべき桃太郎は、川を流れて近海の「鬼が島」へ行く。浦島太郎は、陸のすぐ浦で海中に入り竜宮にいたる。鎖国の影響か、日本には海洋文学は根付かない。大洋に乗り出すことよりも、波打ち際に帰ってくることが目指される。海岸線から内陸（しま）に入り込むことが、始末（しまつ）であり、仕舞（しまい）である。

これに対して *insula*, *isola* は、「孤立 *isolation*」と同じ語源で、個人＝島の語感を強くもつ。一説によれば「海の中、塩の中 (*in-sale*)」に由来し、孤立と大洋交通、塩の交易との関係を示す。*insula*, *isola* は、語義からしてすでに、孤立と交通が否定を媒介にして関係する言葉なのだ。英語 *island* (*ig*=*island*+*land*) は重畳語で、「島の中の島」という孤立の累乗を暗示する。面白いことに *island* を重ねると、*island is land* となり、イギリスが先行して法的議論を組み立てた私有制に基づく土地領有の問題を浮かび上がらせる。また *I-land* (私一土地)、*Eye-land* (眼一土地) と読み換えるとき、個人＝島が徹底して社会的相互性から遮断されてあること、全体への否定を含んだ個の有り様をあらわすだろう。この否定を反転させるとき、「誰も、完全な島であるような人はいない。人は誰でも大陸の一部である」(ジョン・ダン) という表現が出てくる。

クックによる世界図の革新

18世紀中頃まで西欧が拵えた世界図は、ほとんど陸地から成る。沿岸航法の技術水準で敢行されたコロンブスの大西洋航海は、すぐにインド湾内に入り大陸に着くはずだという観念の航海だった。これは、ひそかに入手したトスカネリの地図によって、西まわりでインドに到達できるという確信を得たことが直接の動機だが、そもそも確信犯的宗教者コロンブスに『エズラ第二書』が与えた影響は決定的だった。その42節には、神が水に命じて「地の第七の部分に集め、他の六つの部分を乾かして」耕作できるようにした、とある。つまりコロンブスの頭のなかで、世界の七分の六は陸地だったのである。

「太平洋」の発見者バルボアがダリエン地峡から広大な海を眺め、世界地図に、最初は細く、やがては巨大なアメリカ大陸が描き込まれた後も、事態はさほど変わらなかった。マジェランは、南米の海峡を抜けたあと3ヵ月と20日間も陸地が見えないのはなぜなのか、見当がつかなかった。太平洋の広さはまだ分かっていなかったからだ。未知の南方大陸、北方大陸を想定していた時代は、大西洋、太平洋も、いわば「地中海」イメージ、すなわち陸が中規模の海を囲んでいるイメージで考えられていた。ちなみに大陸を周囲にもつ多島海としては、地中海の交通量が抜群だったが、カリブ海、ペルシャ湾、インドネシアとフィリピン周辺の海、アラフラ海、東シナ海、南シナ海も、「地中海」と呼べる条件を備えている。日本海も、かつては大陸と列島弧に囲まれた「地中海」として意識され交易されてきた。そして実際、沿岸航行の技術は「地中海」イメージで駆使するほかない。

地球の海が陸地の2.5倍も広いことがわかってきたのは、クックの巡回航海（1768-79、この年ハワイでクックはクックされる）が、未知の南方大陸（terra australis incognita その残響がオーストラリア）の夢を消し、南洋の世界図をほぼ確定してからである。クックは、王立協会（Royal Society）の知的戦略によって開発された緯度経度測定のための精密な六分儀、クロノメーター（ハリソン・モデルの製作1760年）、壊血病予防のための塩漬けキャベツ〔ザウアークラウト〕という革新技术を駆使し、自船の位置を、海軍省に蓄積された極秘海図上に確認しながら、狙い通りに航路をとり、いわば大洋を面で支配することができた。そのときから広大な「太平洋」という認識が生まれ、物語の場を提供したのである。それとともに、現実的なイメージをともなった「絶海の孤島」トポスが登場する。

クックが太平洋の異様な広がり測定する以前は、すべての海は「地中海」とイメージされていた。このイメージと当時の沿岸航行の水準から見れば当然なことだが、クック以前の漂流譚の舞台となった島は、マダガスカル、モーリシャス、セイロン、セントヘレナなどで、大陸のそばである。ロビンソンのモデルとされたスコットランドの水夫、アレクサンダー・セルカークが置き去りにされたファン・フェルナンデス諸島は、チリ洋上400マイル。ロビンソンが漂着した島は、原題を見ると、「オリノコ河口」にある。ロビンソンの島を「絶海の孤島」と思い込んでしまうのは、後のロマン派的読解が我々の読みにすでに混入しているからである。

ロビンソン物語における「孤島」

ここでダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』（1719年）に触れておく。この物語こそ、実際の航海技術の歴史に先立って「絶海の孤島」トポスを定着させ、無数の

孤島ロマンや海洋冒険小説の祖先となっていたからである。まことに興味深いことに、この物語は、分節化されないエクリチュールの海に浮かぶ孤島のような中間部として、孤島に漂着しサバイバルするロビンソンの物語をもつ。言い換えれば、孤島の物語の孤島化が行なわれているのである。デフォー原作をよく読めば、主人公ロビンソンは、その孤島に漂着する以前、ギニア交易に従事して、「ガラクタ」で「砂金、象牙、黒人奴隷」を入手したり、モロッコのサリーを根拠地にするムーア海賊に捕まって逃げ出したりしている。ブラジルでは、帰化書類のためにカトリックに改宗までして、砂糖きびプランテーションを経営し、そこの労働力不足を補うために、アフリカへ奴隷貿易、それも密輸で運んでくるという罰あたりの航海に出て、例の島に漂着するのだ。孤島の健気な生存者となる前のロビンソンが、奴隷商人、プランテーション経営者であることを忘れないようにしよう。28年後に島から救出されたあとも、ポルトガルの首都リスボンへ出掛け、ブラジルのプランテーションを為替処理して現金化を図る。続編では、島を訪れて「私の植民地」宣言をしたのち、中国へ行って阿片貿易、アジアの奥地で十字軍まがいの異教徒征伐を行なっている。このように原作では孤島の物語は、意外ときっちり描き込まれた暴力的な商業・交通ネットワークから浮き上がって孤島化されているのである。

しかしロマン派の頃からの誤読や書き換えの積み重ねによって、なぜか奴隷商人ロビンソンは島で独り勤勉に働く個人として、また、原題によれば「オリノコ河口中の島」は「絶海の孤島」イメージで勘違いされてしまう。それには、テキストの他のバッチイ部分から孤島のように浮いた部分に、歴史的現実から遮断された「孤島の個人」の物語をはめ込んだことが効いている。なぜかこの中間部への視野狭窄がはたらき、孤島で勤勉な活動によって〈新世界〉を獲得する孤独な個人の物語を、孤独な読者は（できれば個室に籠もり）、勤勉に黙読することによって、その〈新世界〉獲得を自分のものと勘違いする。そのとき、いわば白紙として設定された孤島は、①所有者のいない空白の土地、②個人の勤勉な労働が無から価値を創出する理想の工場、③悔い改めによって心身の熱病を治すクリーンな病院（魂の更生施設）、④勤勉な学習が主体を形成する隔離された空間（学校）……として様々に読み換えられる。例えばルソーはロビンソンの島をエミール少年が自然と向き合い自然法則（物理学）を学習する学校と考え、経済学者は、孤島で勤勉に働く個人の集合体として社会を考え、「あたかも二人のロビンソンが二つの孤島を結ぶ橋の上で出会う」ような虚構の集積として経済モデルを考えた。かくして孤島の物語の孤島化というペテンを巧みに隠蔽したロビンソンの島は、近代の思考モデルの装置となった。この物語は、宗教・経済・教育の近代の神話として機能したのである。

バウンティ号の反乱

その近代の神話に見合うように、ロビンソン物語は「絶海の孤島」トポスへと切り縮められた形態で流布し、多くの孤島の物語を生むことになるのだが、クックが太平洋の広大さを確かめた直後、「絶海の孤島」幻想が現実のものとなったわずかの時間が存在したことは確かである。つまり、大型帆船の巡洋航海によって、望洋と海が広がっていることが実感され、まだ未知の無人島が領有宣言されずに残っている特定の歴史的時期にのみ、「絶海の孤島」イメージに合致する島が現実存在しえた。クックが「発見」したハワイは、しばらく隔絶状態を保つが、1795年には白人の武力を借りてハメハメハ王朝が成立する。早くも1789年にはオーストラリアへ囚人移送船団が、1797年タヒチにもロンドン伝道協会の移民船ダフ号が到着した。太平洋も大型帆船巡行の時代を迎え、植民地化が急速に進んだ。

太平洋の孤島として名高いものにイースター島とピトケアン島がある。イースター島は古代文明の遺物モアイで、ピトケアン島はバウンティ号の反乱（1789年）という事件で知られる。この反乱は、タヒチのパンの木の新苗700本を西インド諸島さとうきびプランテーションの黒人奴隷の食料用に移植する任務を帯びた船に起こった。ボートで大洋に流されたブライ艦長がトンガからチモールまで3600マイルのサバイバル航海を成し遂げ、タヒチに戻った能天気な反乱者を死刑にする海軍省の追求はすさまじかったが、首謀者クリスチャンは必ず追っ手がくると考え、地図にない孤島ピトケアン（Pitcairn Island）に逃げ込み、船を焼いた。クリスチャンがタヒチの女に産ませた10月生まれのフライデー・オクトーバー・クリスチャンも一緒だった。この命名は事件がロビンソン変形譚の圏内で起こったことを示す。日付変更線を跨いだ彼はのちにサズデー・オクトーバー・クリスチャンと改名される。連れていったタヒチ原住民虐殺と報復の悲惨な歴史のあと、生き残った唯一の白人水夫アレクサンダー・スミスとタヒチの女たちは秘かな宗教的生活を送る。しかしその孤島にさえ1808年、アザラシ猟のアメリカ捕鯨船が補給基地を求めてやってくる。それによって、いまだに謎を残すこの事件の全貌が明らかになったのだった。バランタインの小説（*The Lonely Island* 1880）や、ノードホフ＝ホルの三部作、また五度にわたる映画化で、英米豪あたりに「バウンティおたく」を生んだこの事件は、「絶海の孤島」の物語の成立と交通のネットワークが複雑な関係にあることを教えてくれる。交通なくしてその物語は成立しないが、あまりの交通は物語の基盤を掘り崩すだろう。ともあれバウンティ号反乱の発端（1789）からピトケアン島の再発見（1808）までのわずかの間が、ロマン派好みの「絶海の孤島」イメージが客観的に存在しえた期間だった。文学は、かなりの程度、技術の関数なのだ。

19世紀少年冒険小説の特徴

さて18世紀末から19世紀にかけて、大量の植民者、宣教師、交易者が欧米から太平洋へやってくる。そもそも人は動機がなければ国を出ない。そして人は学んだようにしか見ることはできない。彼らに、あえて海外へ出る目的を与え、異世界での体験をかたどって表現する仕組みを提供したのは、ロビンソン物語の影響を受けた少年冒険物語だった。それらは、クック以後に飛躍的に増大した海洋地理情報を伝達しつつ、冒険の魅力、サバイバル技術、新教信仰の力を少年たちに吹き込み、読者を主人公のような行動へと誘った。そして彼らの植民・宣教・交易の記録が次の世代の少年冒険小説の素材を提供するというサイクルを生んだ。デフォー原作の主人公・読者は大人だったが、これらの冒険小説では子供や少年が対象となり、デフォーが書き込んでしまった暴力的な商業・交通ネットワークは削除され、孤島の物語だけが取り出された。当然、すでに植民地争奪戦が熾烈をきわめたカリブ海ではなく、無数の島々が広がる太平洋が舞台となる。都合よく孤独な難破者を受け容れてくれる「絶海の孤島」はそこにしかありえないというわけだ。

島の数ほど「孤島」の物語は生産された。J・H・カンペ『新ロビンソン』(1779)、ウィース親子『スイスのロビンソン』(1812)、マリアット船長『熟練水夫レディ』(1841)、フェニモア・クーパー『火口島』(1847)、ジェイムズ・F・ボーマン『島の家』(1852)、R・M・バラントイン『珊瑚島』(1857)、J・ヴェルヌ『神秘の島』(1874)などがベストセラーになった。これらの詳細はM・グリーン『ロビンソン・クルーソー物語』(みすず書房)に委ね、ここでは、紋切型に整形された「敵」との戦いという物語の一般的な特徴を概括する。

19世紀少年冒険小説は、どこかの無人島に少年(たち)が漂着し、楽しいサバイバルのあと、鯨、食人種、海賊といった紋切型に整形された脅威と闘い、たくましく成長して、島の領有化を土産に、故国に帰還するという筋立てを典型とした。この典型は幾重もの虚構と奇形化の上に成り立っている。①最近の動物行動学の観察映像が示すように、鯨には、特殊な条件下で解発される摂食行動はあっても、『ジョーズ』(ピーター・ベンチリー)ばりの攻撃本能はない。19世紀になって強調されるようになった鯨の脅威は、むしろ砲艦をもって進撃する西欧国家の軍事主義の投影にすぎない。②コロンブスの進出直後、その食人属性(カニバリズム)が確認される前に絶滅させられたカリブ食人種(カニバル)は、『ロビンソン・クルーソー』以来、文学に呼び出されて、「獰猛な敵」あるいは「高貴な野蛮人」を演じてきた。これまた、モンゴロイドあるいはネグロイドに対する偏見に、白人の肉食文化が隠蔽した過去が投影されたものにほかならない。食人種はセンセーショナルな興味とともに、抵抗を示した先住民のなかに「野蛮」の徴標と

してつねに「発見」された。ハワイ、ニュージーランド、フィジー、マルケサス、ニューギニア……と食人種トポスが転居するさまは、文化人類学の研究対象だろう。③水夫反乱は、大量の操帆労働力を必要とした大型帆船時代の産物である。蒸気船になると、船員における荒くれ水夫の比率、そして反乱の誘因となる苛酷な重労働そのものが減少した。さらに、大洋は軍事・商業・交通ネットワークで連結され、大規模な国家間の衝突はありえても、部分的な海賊行為の余地は縮減した。そして、反乱を起こしても、バウンティ号のピトケアン島のように逃げ込める隠れた無人島はどこにもなかった。海賊物語は、かつて海賊国家として隆起した西欧諸国とりわけイギリスの禁止されたエネルギーの投影だった。

現実の「絶海の孤島」

19世紀半ばには地球上に、あらためて「発見」されるような、言い換えれば、冒険ロマンを生じる形で許容するようなく島は、「生まれたての珊瑚島 Koralleninseln は別として」、どこにもなかった。疎外されざる生を求めるフォイエルバハを茶化したこのマルクス＝エンゲルスの表現（『ドイツ・イデオロギー』1845）の中に、隈無き植民地化の進展と資本制の貫徹を読み取れると同時に、冒険ロマンの願望の投射対象であった「珊瑚島」というコトバが現われているのは興味深い。

ピトケアン島が再発見された1808年、フルトンの蒸気船クレアモント号がハドソン河で就航する。すぐさま蒸気船による大洋航路が開かれ、1818年にはリバプール－ニューヨーク間が26日で結ばれた。ヴェルヌ『80日間世界一周』（1872）の頃には、陸海の運輸網が地表を覆いつつあった。それゆえフィリアス・フォッグは、銀行窃盗容疑でフィックス刑事に追われ、パスパルトゥをともなったドタバタを経験しながらも、基本的には時計と各種の時刻表だけを見ながら世界一周を貫徹できたのである。1869年にスエズ運河とアメリカ横断鉄道が開通したことは暗記しておいてよい。1884年グリニッジ標準時が定められたことは、英国を尖兵とする西欧諸国の表象知による世界支配完了の表現だった。1889年サモアに移住したスチーブンソンは植民地化をめぐる争いを見た。1895年タヒチに移住したゴーギャンは浸透した西洋文明に幻滅し、マルケサスへ移る。1899年には世界の植民地分割終了を示す帝国主義戦争（フィリピン米西戦争、ボア戦争）が起こっている。

現実の「絶海の孤島」は、それゆえにこそ、軍事・商業の拠点となっていく。しかし産業社会の網の目が世界を覆い、どこにも領有されざる無人島などなくなった時代こそ、逆に、奇形化された「人食い鯨」「吞んだくれて仲間殺しをする海賊」「宣教師を釜茹でにする食人種」などの紋切型の脅威を配置した「絶海の孤島」ロマンスを大量生産

した。本国の少年に、これらの脅威との戦いのために体を鍛えておくように奨励して植民地へ送り出す冒険物語群、産業革命後の勤労者の逃避願望を宥めつつ産業社会に再び復帰させる物語群は、こうして生まれてきた。

19世紀後半の作品になると、「絶海の孤島」の演出は凝ってこざるをえない。そんなものはもはや存在しないにもかかわらず、存在しないようにした資本制と植民地支配を担う労働者・児童をリフレッシュするために、「孤島の物語」の要請は強まったからである。興味深い例として『15少年漂流記』（1888年）の島の設定と年代操作を分析しておく。この作品は、いわゆる「絶海の孤島」ほど、大型帆船の寄港地として重要視され、やがて蒸気船による大洋航路に組み込まれていった「交通」の現実を、巧みに表現しながら隠蔽する。そして興味深いことに、ペリー来航と日本の開国は、この「交通」の文脈によるところが大きいのだが、日清戦争直後（明治29年）の森田思軒『十五少年』が、遅れ馳せながら、取り急いで、この文脈を喚起し、海洋少年を立ち上げたことが、フランスでも知られていないヴェルヌのマイナー作品を、日本でのみ異例なベストセラーにするのである。

『15少年漂流記』の場合

『二年間の休暇』という原題のこの物語は、二ヵ月を太平洋クルーズで過ごそうとしたオークランドの寄宿学校の14人の生徒たちが、黒人の少年水夫とともに漂流し、孤島で二年間サバイバルしたという筋である。この物語は、『ロビンソン・クルーソー』同様、南米大陸そばの動植物豊かな「未知の土地」が無人島として残されているという虚構の上に成り立っている。アフリカ奥地をのぞいて植民地分割が完了した1888年に『15少年漂流記』は書かれたが、この年代に未発見の島など、どこにも存在しない。サルキ号がペルーの蒸気船キト号と衝突することに注目しよう。すでにペルーとニュージーランドの間に定期航路が開かれている。そして少年たちが名付けた「チェアマン島」は地図上にすでに記載されている。（ただし「ハノーバー島」という名前は架空のものである。それは、風「空の巨人号」のアイデア源となった友人ナダールの熱気球「巨人号」が落下したドイツのハノーバーを借用したものだから）。島の帰属は明記されていないが、おそらくチリ領であろう。現実政台のなかに置き戻してみれば、この島をめぐるフォークランド諸島のように、南米国家と西欧国家が争うことが考えられる。

しかし、そもそも肥沃で居住可能な土地には先住民がいるはずである。アルゼンチンの大草原に「危険」なプエルチェ族がいると、地理に詳しい航海士エバンズも語る。ところが、少年たちが長期休暇を過ごすことになるこの島からは、先住民が拭い去られている。「船が砂浜に座礁して一時間たっても、原住民の姿はまだまったく見えなかつ

た」。そして最後まで、その地域にいるはずのセナンクル族は現われない。代わって描かれるのは、白人先住者である。しかしすでに遺骨であることが、彼（フランソワ・ボードワン）が接触したかもしれぬ先住民をも歴史から消去しているのである。

物語は、外部の連絡がない島への視野狭窄に、巧みな年代操作を付加する。フランソワ・ボードワンの漂着記録と思われる「1807 FB」の記号によって、物語のサバイバル部分の雰囲気は一挙に81年前に戻されるからである。まさにバウンティ号残党の生き残りが確認される年代である。それは、未知の無人島が領有宣言されずに残っている特定の歴史的時期であり、この時期にのみ、「絶海の孤島」トポスに合致する島が現実存在したことは前述した。『15少年漂流記』は、81年を遡る年代操作によって、辛うじて、この文学トポスに接続される。このように虚構性を帯びた孤島に、蒸気船の時代に活動の場がなくなったはずの反乱水夫の集団が呼び出される。そのとき、時代を遡れば遡るほど生存していたはずの先住民は消去されているのである。

少年たちの冒険世界の演出という点で、島の奇形化は極まっている。氷点下30℃まで下がる極地の冬に「美しいフラミンゴ」が丸焼き料理になるために罠にかかり、ペンギンがやってくる南緯51度の島にカバが登場する。これは、島にいるはずがないカバ、象が登場し、小さな入江にクジラの群れが踊り、あまつさえは10メートルのボア・コンストラクターが山羊の丸呑みを演じてみせる『スイスのロビンソン』の馬鹿馬鹿しさをしっかり受け継いだものである。「羽を広げた大きな蝶の形」の島のことさらな奇形化は、怪鳥を思わせる『神秘の島』（1874）でも試みられたが、「立ち上がった太めの竜」という『宝島』（1883）のピクチャレスクな造形の影響も加わっている。様々な気候風土が同居しているのは、植物園の配置に似ている。しかし、沼と砂丘の接合は奇妙である。温度湿度を人工的に制御する植物園装置ならばいざ知らず、砂丘と沼が近接して、沼の水分がどうして保たれるのか分からない。さらに不思議なのは、小さな島の中央にある巨大な淡水湖である。これは、「島か大陸か」の思考フロー・チャートを複雑に作動させ、ならびにその枠内でのドノバンとブリアンの対立を演出するトリッキーな形態なのだが、一体どのように形成されたのか。確かに、針葉樹林の十数倍の保水量（営林署あるいは水不足に悩む福岡市政がまったく理解していないこと）をもつブナ森が設定されているものの、「高い山がなく、……土地は平ら」で、湖に流れこむ川は小さいのに比べ、注ぎ出る川は運河に使われるほどに大きいのである。こうした異質な要素のコンパクトな詰め合せは、博物学の眼差しを集約したものである。奇怪な「蝶形」の島は、昆虫標本のように、その博物学の眼差しをピン留めしている。

このように、幾重もの虚構の上に少年たちの冒険は成立する。彼らは、原題に明示されていた「二年間のバカンス」ですっかり成長する。作者は虚構を隠しはしない。「おそらく、寄宿学校の生徒たちがこのような休暇を過ごすことは決してないだろう」。それ

は、虚構を虚構でないとする二重の虚構の上で、19世紀冒険小説のお決まりの任務をはたすためである。だから作者は続ける。「しかし、すべての少年たちに知ってほしい。秩序と熱意と勇気があれば、どんな危険も切り抜けられるのだということを。……サルキ号の少年たちは、生きるための困難な試練によって成長し、故国に帰り着いたときには、下級生はほとんど上級生のようになり、少年たちはほとんど大人のようになっていたことを、忘れないで欲しい」。これが、この冒険小説の目的（終末部）の言葉である。

その後の「孤島」の物語

少年の勇気の素とされた冒険小説を読んで出征した士官層が、大砲と機関銃でバタバタ殺された第一次世界大戦は、冒険小説を変えずにはおかなかった。第二次大戦そして核爆弾は、孤島での生存の一義的意味を解体した。戦後、ロビンソンタイプの冒険小説の息の根を止めるような作品が出る。ゴールディング『蝇の王』（1954）は、核戦争のさなかに飛行機から脱出管で放り出されて孤島に不時着した少年集団の内部闘争と、ついには核攻撃を受けたロンドンのように全島が炎上する様を描いて、『珊瑚島』『15少年漂流記』の反転像を示した。煙をみて上陸した英海軍士官の前に、「蜚人」化した少年たちが転び出る。「英国少年なら、もう少しまともにやれそうなものだ」と士官は語る。「初めはうまくいっていたんです」「ああ、分かっているよ。初めはものすごくうまくいったんだね。『珊瑚島』みたいにね」。小説末尾のこの会話は、冒険小説の幻想が現実を呑み込む状況を照出している。一見するとここで大人が、幻想に狂った子供たちを救出するかに思える。しかし少年たちを収容した巡洋艦が向かうのは、中枢がなくなったあとも際限なく続く殺戮の場でしかありえない。すでに世界が戦争化している。

理想のアドベンチャーランド、国民国家の主体のトレーニング場は、もはや虚構小説の世界からも消える。にもかかわらず、アニメやディズニーランドのような擬似現実はずたえ「絶海の孤島」を拵えるだろう。このトポスに現代におけるサバイバルの可能性が賭けられるのか否か。アイロニカルな分析を要するが、今後も考えていきたい。